

第四章 一国人民の智徳を論ず

A. 大意

1. 初めに、「文明の進歩・発展」の原動力は何か、という事について論じよう。「文明」というのは人の「智徳の進歩」を指すということはすでに前章で論じておいたとおりである。しかも、ここで注意しなければならないことは「智徳の進歩」といっても、個々人の「智徳の進歩」を言うのではなく、「衆人（一国人民）」全体の「智徳の進歩」を指して言っているということある。だから、「文明は一人の身について、p. 80、見るべきものなり」ということになる。たとえば、半開のアジア諸国にも必ず二三の「智徳優れた文明人」がいるものである。しかし彼ら二三の「智徳優れた文明人（哲人・英雄）」の「文明力（智徳）」が文明発展の原動力になっているかといえ、そうではない。何故なら、彼ら二三の英雄・哲人の智徳は必ず「全国に行われる気風」に制せられるからだ。彼らの智徳は「全国に行われる気風」に制せられて力を失い、文明を動かしていく原動力にはなりえない。文明を動かしていく原動力は、実は、「全国に行われる気風」つまり「一国人民が有する智徳」にはかならないのだ。福澤はその事を次のように表現している。「世の文明は周ねくその国民一般に分賦している智徳の現象であるのであるから、二三の人の力ではいかんともし難いのである（p 92）」と。

2. 次に、（文明）社会現象に存在する「法則性（因果律）」をつかみとる事を可能にする、「統計学的手法（スタチスチク）」について論じることしよう。人の心の働きは千緒万端、千状万態の変化を見せるものであるから、一見、そこには「定則」がないかのように見える。あるいは、「人の心の変化を察するは人力の及ぶ所に非ず」と、それを把握する事を諦めてしまふかもしれない。しかし「文明を論ずる学者には自からこの変化を察するの一法がある」。蓋しその法とは何ぞや。「天下の人心を一体に見做して、時間的にも空間的にも広く比較して、文明現象の現れるものを証するという方法である（p 86）」。この「統計学的手法」の有効性を福澤は次の言葉で表現している。「一国の人心を一体と為してこれを見ればその働きに定則あること実に驚くに堪えたり」。この方法を用いれば、心の働きに発する（文明）社会現象も因果連関的に把握する事が可能になる。例えば「婚姻」という（文明）社会現象についてみてみよう。そこには「近因」と「遠因」とがあることに注意しよう。「当人の心」、「父母の命」、「媒酌の言」等が「近因」である。このような「近因」は発見しやすいものではあるが、事の本質を掴めないし、人の耳目を惑わす事がある。（文明）社会現象を因果連関的に把握するには、時間的にも空間的にも諸現象を幅広く比較して、「近因」の背後にある「遠因」にまでたどり着かねばならない。「世の縁談を整わしめ、或いはこれを破らしむるものは、世間唯有力なる米の相場あるのみ」。福澤は「米の相場」こそが「婚姻」という（文明）社会現象の「遠因」であるといっているのである。「遠因は一度び之を探得れば確実にして動くことなし」。我々は「統計学的手法（スタチスチク）」を用いることによって（文明）社会現象の「遠因」を掴み取り、その事によって（文明）社会現象を因果連関的に説明する事が出来ると言っているのである。

3. 以上1. と2. で論じた事と関連して、ここで、「時に遇わず」とは何を意味するか、ということについて論じておこう。和漢の歴史をひも解いてみれば「時に遭う事が出来なかった」英雄（例えば楠正成）や君子（例えば孔子・孟子）が大勢いる。その場合、英雄・君子みずからが之を嘆息して、自分の力（智徳）を用い生かしてくれなかった人々に不平を鳴らしたり、あるいはまた、後世の学者が、涙を流して、例えば正成を見殺しにした後醍醐天皇の不明を残念がったり、孔孟を用いなかった周の諸侯の罪を論じたりしている。「時に遭わず」とはこのように英雄・君子の力（智徳）を人君が生かしきれなかったという意味なのであろうか。「p 94」。私の見解は全くこれとは異なる。孔孟を用いなかったのは諸侯の罪ではない。諸侯をして孔孟を用いることを妨げた「何か」があったのである。正成の討死は後醍醐天皇の不明のせいなのであろうか。そうではではない。正成をして死地に至らしめた別の「何か」があったのである。それではその「何か」とはなにか。「即ち時勢なり。即ち当時の人の気風なり。即ちその時代の人民に分賦せる智徳の有り様なり」。孔孟が諸侯に用いられなかったのは、（その時代の人民に分賦せる智徳の有り様に発する）、「時代の勢い」に妨げられたからである。正成は「時代の勢い」に敵して戦ったが故に敗れ討死にしたのである。「右所論の如く p103 齟齬したることを言うなり」。逆に、英雄・君子が「千歳一遇の時を得た」というのは、ただ、時勢に適して人民の気力を逞しくせしめた、ということの意味するにすぎない。このように、時代を動かしていく力は英雄・君子の側にあるのではなく、人民に分賦せる智徳の側にある。人民に分賦せる智徳の現れである「衆論」の向かう所は「天下に敵なし」なのである。

4. 最後に文明の目的を達する上での「政府」と「学者」の職分について論じてこの章を結ぶことにしよう。文明の目的を達するためにはそれぞれが—たとえば「政府」や「学者」や「工商」等のそれぞれが—それぞれ、文明の職分を分かち持ち、文明の一局を勤めることが必要である。「工商」の職分は私の業を営みて国の富を増進させる事にある。それでは「政府」の職分は何処にあるかといえ、それは、今現在、国で起きている事件・課題に鋒先をあてて即時にそれを解決する事にある。それに対し「学者」の職分はなにかといえ、それは日ごろ社会の動き・形勢を注意深く観察して将来の為にそなえ、良き事の実現を計画したり、悪しき事を未然に防いだりする事である。「p 108」。「蓋し政府の働きは猶外科の術の如く、学者の論は猶養生の法の如し」。現今学者たちは「政府の事務の挙がらないのは政府役人の罪である」と「政府（役人）」の非を咎めている。しかし1.、2.、3. で論じてきた事から明らかのように、学者たちが「政府」の非を責めるのは誤っている。私に言わせれば、罪あるのは「政府」の側ではなく「衆論」側にある。何故なら、先にも述べたように「衆論の向かう所敵なし」、「政府」は「衆論」の力には到底及ばない、「政府」は「衆論」の向かう方向に向かつて進まざるをえないからだ。それゆえ、私は断言する。天下（学者）の急務は「政府」の非を咎める事にあらず、「先ず衆論の非を正すに在る」と。

B. コメント

1. 「**全国に行われる気風**」：英雄・君子といえども「全国に行われる気風」に制せられてそれには勝てない、時代を動かしていくものは「全国に行われる気風である」。福澤のこの思想明らかに、伝統的な歴史観（英雄史観・治者史観）に対する、アンチ・テーゼを表わしている。それでは「全国に行われる気風」の根本は何か。「一国民の有する智徳」である。「その時代の人民に分賦せる智徳の有り様」が「全国に行われる気風」となって現象するのである。

2. 「**(文明) 社会現象**」と「**統計学的手法**」：ここで「(文明) 社会現象」というのはウェーバーのいう「文化現象」のことである。「統計学的手法」を「文化現象」に存在する「定則」の発見のために日本で初めて利用したのは福澤である。

3. 「**定則**」：「法則性」或いは「因果律」のことを福澤は「定則」と呼んだ。福澤は「自然現象」のみならず「文化現象」のなかにも「定則」が流れていること、そしてそれは「統計学的手法」によって掴み取る事が出来るという事を見抜いたのである。

4. 「**気風**」、「**時勢**」、「**衆論**」：それらの根本は「一国民が有する智徳」であり「その時代の人民に分賦せる智徳の有り様」である。それが現象して「全国に行われる気風」となり「時代の勢い」となり「衆論」と成るのである。

5. 「**文明の目的**」と「**文明の職分 (一局)**」：「文明」の目指すところは、近くは、「一身の独立」による「一国の独立」にあり、遠く（究極）は、「人格の完成」にともなう「四海同胞（国家の消滅）」社会の実現にある。文明の目的は智徳の進歩・発展によって達成されるのであるが、それは人間交際のなかで、それぞれがそれぞれの「文明の職分 (一局)」を果たす中で、人間の共同作業として達成されるものである、というのが福澤の基本認識である。

6. 「**天下の急務は先ず衆論の非を正すにあり。**」：現今日本の文明は未だ半開の段階にある。それは「日本国民の有する智徳」が未だ半開の段階にまでにしか進歩・発展していない事を意味している。つまり「智徳の進歩」による、「一身の独立」が未だなされていないし、儒教倫理に基づく縦形社会がはびこっている。そのような日本国民の智徳の有り様に発する「半開の気風」が現在の「衆論」を形成し、それが「政府」の足を引っ張っている。今やこの「衆論の非」を正す事が天下の急務であり、その急務を果たすのは、とりわけ、学者（学問・教育関係者）に任された職分である。福澤はこう吠えているのである。